

サーリプッタに代表された最初期の佛教

中 村 元

一 はしがき

近年刊行されたジャイナ教の古い典籍である『聖仙のことば』⁽¹⁾ *Isbhāsyaṇī* は四五人の聖仙の思想を個人別に傳えているものであるが、その中にはウッダーラカ、ヤージニヤヴアルキヤなどウパニシャッドや敍事詩に出て来る哲人の思想も傳えられているし、またジャイナ教の諸聖者、アーजीーヴイカ教のゴーサーラ、釋尊の就學したラーマブッタなども個人別にこれらの思想が述べられている。佛教に關して言及していることはないか、と思つて検討してみると、第九節に *Mahākāśava* (= *Mahākāśyapa*) が、第三八節に *Sāriputta Buddha* (= *Sāriputra Buddha*) が、第二節に *Vajjiputta* (= *Vatiputta*) が言及されている。シュプリングは最後のものを犢子部 (*Vātsīputra*) 派の祖と解しているが、或いは十事の非事の問題をひき起した *Vajjiputtaka* のことではないかと考へて検討してみることも可能であらう。其他諸節につ

サーリプッタに代表された最初期の佛教 (中 村)

いては文句を嚴密に検討してみないと何とも言えないが、第三八節が釋尊の高足サーリプッタに言及し、その思想を述べていることは、まず間違いない。まずその一節を譯出し、次いでその内容を検討することにしよう。原文ははなはだ難解なアルダマーガデーで書かれているので、よく解らぬところもあるが、ともかくいちおうの手がかりを提供したいと思う。

二 サーリプッタに關する所傳の翻譯

『安樂に (容易に) 得られた安樂は絶對の安樂にほかならぬ。苦しんで得られる苦しみは、わたくしが合することがないように (と願う)。』 (一)

——とブッダ、尊敬さるべき人 *arāhat* : 仙人であるサーテイブッタが語つた。⁽²⁾

快い食物を食して、快い坐臥所を享受して、快い家の中で (佛教の) ピクは心を統一して禪思する (二)
不快な食物を食して、不快な坐臥所を享受して、不快な

家の中でピクは（考えたくない）苦しみを念ずる。（三）

そのような多数の諸種類の（事物を）捨てて、賢者、知慧ある人は他のものを食らない。これが諸々のブッダの教えである。（四）

種々なる種類の音聲が耳に達したときに、それに對する貪り *gehi* = *grddhi* またはことばの過失を、思慮ある賢者は正しく除くべし。（五）

同様に、めいめいの執著による色かたち・香り・味・觸れるものに對する貪り、またはことばの過失を、思慮ある賢者は正しく除くべし。

目ざめている人（＝努め勵んでいる人）にとつては、自分の苦しみを生ずる五つの原因（＝感覺機官）は眠つてゐる。

それ（＝自分の苦しみ）を滅すために、常に知慧ある者であれ。（六）

「病苦を」滅ぼすために、苦しみであろうと楽しみであろうと「藥として醫師により」智をもつて説示された。同様に迷妄 *moha* を滅ぼすために苦しみまたは楽しみが「手段として師により」説示された。（七）

「悪い醫師は」苦しみをも楽しみをも原因に應じて治療することをしない。

「心の病いを癒す醫術に」つとめ勵む者（*uttā* = *yukta*）が苦しみまたは楽しみを治療するであらう。（八）

迷妄を滅ぼすためにつとめ勵んでいる人が苦しみまたは楽しみを「よく知つてゐるのである。」

迷妄を滅ぼすために「つとめ勵まない人は」原因に應じて苦しみも楽しみも「よく知つて」いないのである。（九）

空虚なる人には恐れおののくこと *samvega* がある。最上の人には厭い離れること（*nirveda* = *nirveda*）がある。

哀れな状態にある人々の區別「を説き示す」教示が存在する。（一〇）

種々なる状態の生滅に關しては全知者（＝ブッダ）によつてことばが語られた。

それは共通な點に關していえば、歌われた教えをつくり出す。區別に關していえば、（それぞれの人の）急所を貫くものである。（一一）

（聖者の）威容 *vesa* = *veśa* は一切の生きものに對するあわれみ *savvasatta-daya* と活動せざること *nārambho* と所有しないこと *nāpariggāho* とである。――

善い性質 *satta* と苦行 *tava* とあわれみ *dayā* とを最上のジナたちは語る（一二）

感官を制御した勇士にとつては森林や庵（道場）*assama* に何の用があらうか？

どこであらうと楽しむところを森林である「とせよ。」そ

れがまた庵なのである。

(一三)

(感官を)制御した人にとつて森林に何の用があるうか？
(感官を)制御した人にとつては庵において何かせむ？

病いの癒えた人に薬は用がない。また武器にとつては碎かれ得る(脆い)性質は用がない。

(一四)

よい心がけて自己を修した人にとつては森林も(村における)財寶も空虚(sunna || sunya)である。

この全(世界)は(その人にとつては)禪思するためのものである。あたかも矢の刺さつた人にとつて矢の刺さつた心の中で(苦しみを念ずるようなものである。)(一五)
哀れな運命の人にとつては、種々の状態を示す大地は苦しみの相のものである。

一切のものは業をとるために存する。あたかも愛人にとつては(一切が)愛欲の心のうちにあるがごとくである。

(一六)

正しいこととあわれみと束縛する條件のない制御と苦行とヨーガなるものはすべて、一切の業を滅ぼすものである。

(一七)

あたかも行動を起すことは意義をもっているかのごとくであるが、(實は)意義をもっていないものであると知れ。あたかも象を飼育している人の側腹を象が打つて殺すようなものである。

(一八)

いかなる仕事でもそれをなしとげる努力を實行することのできない人はその仕事をすべて避けることになる。

たとえば愛欲にとらわれた人が(修行者の)裸のすがたや剃髪したすがたを避けるようなものである。

(一九)

賢者は避難所を知るべきである。嶮難の路を通つて山の頂き(——避難所の無い——)に赴かない。

傲り高ぶつた獅子や賢明な象を、野干たちは食すべきではない、「怒らせてはならぬ。」

(二〇)

(聖者の)威容や覆いを身につけている人はそれをもつていない人を常に避けるべきである。

賢明な人は種々なる嫌惡をひき起すものをたもつていべきではない。

(二一)

清淨行者である修行者は(もしも何らかの理由により)怒つたとしても、迷妄をかき立てることを避けよかし。迷つた獵師は鹿に向つて矢を射ても貫くことがないからである。

(二二)

覆いと特相とを必らず現すべし。何のために獵師は歌い、また鳥は沈黙するのであろうか？(歌っている獵師に殺す意圖のあることを服裝と特相とから鳥は推知するのである。)

(二三)

(世間における)仕事を完成せしめる原因と結果とが採用せらるべきである。しかし解脱を完成せしめるそれら兩

者（原因と結果）は特に知らるべきである。（二四）

まとう衣に關しても（聖者の）威容に關しても實際に修したことを明確に知るべきである。（その兩者によつて欺かれてはならない。）

（物語に知られているように）深い（見通し難い）まとう衣の中に青い野干がいたのであつて、國王はいなかつた。（野獸たちはだまされないから。）（二五）

種々さまざまの心（他人の意見）に従つて語つている人は對象を執する人であると知れよ。

對象の連續（絶え間なく對象がつずいていること）を見て（食つて）いる人にとつては、對象を執する人から離れることが（すぐれている。）（二六）

偽りのごとく、皮衣（による野干）のごとく、必らず明確に知るべし。

（王の威光の）すべてを盗みとつて（わがものとなしても）、假りのつくろひに關して考察がなされる（見破られる。）（二七）

種々なるすがたに従つて語る者は本性に關しては無力であると知れ。

あたかも花をとるためにスナンダー⁽²⁰⁾が筏作りの家におもむいりのたごとくである。（二八）

物に關しても場所に關しても時間⁽²¹⁾に關しても、あらゆる

ことに關して、あらゆるしかたで、特相あるあらゆる生ける者（個我）のすがたを明らかに知れ。（二九）

このように、かれはブッダ・休止せる者・惡を離れた者・制御せる者・解脱に適した人であつて、要するに、人格完成者となつて、速かにこのような（世間的な）意義ある状態に⁽²²⁾もどつて來ないことになる、とわれはいう。』

三 サーリプッタへの比定

右に擧げられているサーティプッタは佛弟子のうちで第一人者と見なされていたサーリプッタを意味していたことは間違いないと思われる。

(1) Sati. が Sati. に轉換することは音韻變化の上からは容易に行われ得ることである。恐らくマガダ地方で佛教が起つたときにはマガダの方言で Sāriputta と言われていたが、パーリ語に聖典が直されたときに Sāriputta となつたのであろう。

(2) 四五人の聖仙の教えがこの書の中で述べられているが、この四五人とも奥書の中ではみなブッダなどと呼ばれているが、本文の中ではサーティプッタのみが「ブッダ Buddha 尊敬さるべき人 (arahaṭ 阿羅漢) 仙人 isī」⁽²³⁾とよばれて、特に「ブッダ」という呼稱が附せられている。これはブッダとなる教えをかれが特に強調していた

ことを示す。あるいはかれが特にブッダだと見なされていたのだと解し得るのかもしれない。

(3) かれの説を述べた次の節(第三九節)ではサンジャヤ Sanjaya という聖仙の説がのべられている。佛典によると、サーリプッタは釋尊に歸依する以前には王舍城に住んでいたサンジャヤという哲人の弟子であつたのであるから、サンジャヤと並んで『聖仙のことば』に出て来るサーティプッタは右のサンジャヤの弟子であつたサーリプッタと同一人であると解してよいであらう。『聖仙のことば』に出て来るサンジャヤの教えは、佛典に出て来るサンジャヤの思想とほぼ首尾對應する。

四 サーリプッタに代表された佛教

ところでわれわれは右の一節に重大な意義を認めることができる。

まず『聖仙のことば』には釋尊がどこにも言及されていないで、ブッダとなる教えがサーリプッタの教えとして紹介されている。この書の中に出て来るマハーカッサヴァおよびヴァッジプッタの教えもあるいは佛教者であつたかれらのことばを傳えているのかもしれないが、しかしかれらは佛教者としては傳えられていない。またそれらのことばに特に佛教的な特徴も認めがたいが、しかしかれらが佛教者でなかつたと

サーリプッタに代表された最初期の佛教(中 村)

も斷定できない。そのわけは、『聖仙のことば』が佛教最古の典籍であるとして一般に承認されている『スッタニパータ』よりも少くとも部分的には古いかたちを傳えていることが、判明しているから、『聖仙のことば』に傳えられているマハーカッサヴァやヴァッジプッタの教えが歴史的に古い、もとのものを傳えていて、現在のわれわれが(佛教)と考えている内容が實は後代の成立のものであるかもしれないという可能性も考えられる。ただここで明言し得ることは、初期のジャイナ教徒の間では佛教は釋尊の教えとしてではなくて、サーリプッタ(またはマハーカッサバ、ヴァッジプッタなど)の教えとして傳えられていたということである。そこから考えられることは、釋尊は臨終にもアーナンダその他極く僅かの人々につきそわれていただけの微々たる存在であつたが、それを大きな社會的勢力に發展させたのは、サーリプッタその他佛弟子のはたらきではなかつたか。

サーリプッタが釋尊の後繼者と見なされていたことは『スッタニパータ』にも示されている。

『誰があなたの將軍なのですか? 師の相續者である弟子は誰ですか? この轉ぜられた法輪を、誰が(あなたに)つづいて轉ずるのですか?』

とセーラ・バラモンが問うたのに對して、釋尊は答えた、
『わたくしが轉じた輪、無上の法輪、をサーリプッタが轉

する。かれは完き人につずいて出現された方です。』

四 ブッダの觀念の變遷

さらにわれわれは「ブッダ」という觀念の變化を次のようにたどることができる。

(1) 初期のジャイナ教においては、『聖仙のことば』の各節の奥書から見ると、聖仙はすべて、宗教の區別を問はず（ブッダ）であつた。ウッダーラカも、ヤージニヤヴァルキヤも、マハーヴィーラも、サーリブッタも全部ブッダである。

(2) ところが、サーリブッタだけが特にブッダであることが強調されている。これはサーリブッタがブッダになることを特に強調したからではなからうか。

(3) 『スッタニパータ』のパーラーヤナ篇の古い詩句（すなわちパーラーヤナ篇のうちで序文の一節の詩句と結尾の一節の詩句とを除く主要部分の詩句）においては、ブッダといふことばが出て來ない。つまりこの時代の佛弟子たちは釋尊を特にブッダだとも思わなかつたし、また特別にブッダと稱せられるものにならうともしなかつたのである。

(4) 次の發展段階として、尊敬さるべき人を一般に（ブッダ）とか（仙人）とか（バラモン）とか呼んでいた段階

がある。

『革紐と革緒と綱とを、手綱ともども斷ち切り、障礙を滅して、目ざめた人（ブッダ）——かれをわたくしはバラモンと呼んでいる。』

『すべて生きとし生ける者の死生を知り、執著なく、幸せな人、覺つた人（ブッダ）——かれをわたくしはバラモンと呼ぶ。』

『牡牛のように雄々しく、氣高く、英雄、大仙人、勝利者、欲望のない人、沐浴者、覺つた人、——かれをわたくしはバラモンと呼ぶ。』

『こだわりなく、偽りなく、このような範たる人として來りたもうた師、目ざめた人（ブッダ）。』

のみならず、個々の修行者、托鉢して廻る佛弟子たちが（ブッダ）とよばれていることがある。

『修行者は時ならぬのに（正午過ぎに）歩き廻るな。定められた時に（正午前中に）托鉢のために村に行け。時ならぬに出て歩くならば、執著に縛られるからである。それ故に諸々の目ざめた人々（buddha）は時ならぬに出て歩くことはない。』

(5) ところがそのうちブッダは特別にすぐれた人と考えられ、その呼稱として用いられるようになった。

『どうして（目ざめた人）（ブッダ）と呼ばれるのですか？』

という問いに對して

『あらゆる宇宙時期と輪廻と生ある者の生と死とを二つながら思惟辨別して、塵を離れ、汚點なく、清らかで、生を滅ぼしつくすに至つた人——かれを（目ざめた人）（ブッダ）と呼ぶ。』

と答えている。これは前後の關係から見ると、當時聖者をインド一般に（ブッダ）と呼んでいた事實に對する批評なのである。

（6）しかしついに（ブッダ）とは釋尊（あるいは釋尊に匹敵し得る人）のことであると考えられるようになり、この傾向は『スッタニパータ』の詩句の新層の部分に顯著であり、散文の部分になると決定的になつた。たとい（諸のブッダ）という場合にも、「釋尊に匹敵し得るような佛」を意味しているのである。「正覺者」(sambuddha) という呼稱はこの段階に屬している。

さてサーリプッタをブッダとよんでいるのは、發展の初期の段階を示しているものであり、原始佛教聖典のパーリ文の散文の部分よりはるかに以前の段階を示している。

なおこの原典からみると、當時（佛教）というものは認められていなかったし、開祖釋尊なるものも一般に問題とされていなかった。たゞサーリプッタなどすぐれた個々の修行者あるいは指導者の存在が認められていただけである。佛教の

いわゆる宗教的、性格なるものも後代になつて現われ出たのであろうと考えられる。

右の諸詩句から見ると、サーリプッタは知慧を重視し、知慧のはたらきによつて苦しみを滅ぼすことができる、と説いていた。これは「知慧第一の舍利弗」という傳えに一致するようには思われる。

右の「聖仙のことば」のうちにサーリプッタの教えとして『種々なる狀態の生滅に關しては全知者（リプッタ）によつてことばが語られた。』

とあるが、これは佛典における傳説に對應する。佛典によると、サーリプッタは、アッサジ Assaji ピク「——通常五ピクの一人と解せられている——」が托鉢のため王舍城に入つて來たときそのすがたに打たれた。『誰を師としているのか？ 誰の法を樂しんでいるのか？』とたずねたところ、アッサジは自分は釋尊の弟子であると答え、次の詩句を唱えた。

『諸法是因より生ずる。

如來はその因を説きたまう。

諸法の滅をもまた

大なる修行者はかくのごとく説きたまう。』

そこでサーリプッタは「法の眼」を用いたという。サーリプッタはアッサジ・ピクから教えられた趣意を説いていたので、ジャイナ教徒がその趣意をまとめて、このように傳えた

のであろう。

また右の詩句によると、サーリプッタは「一切の生きものに對するあわれみ」*sa vva-satta-daya* を説いたというが、これは『聖仙のことば』によると、サーリプッタ特有の教えであり、あるいは佛教徒であつたかもしれないマハーカッサヴァやヴァッジプッタのことばの中には出て来ない。また仏典をみると、サーリプッタの語として次のような詩句が傳えられている。

『それ故におのが敵に對しても慈しみを起すべし。慈しみの心を以て遍滿すべし。これは諸仏の教えである。』

この教えが仏典においても特にサーリプッタに歸せられているところに問題がある。『スッタニパータ』のパーラーヤナ篇やアッタカ篇を見ても慈悲の教えは殆んど説かれることなく、専ら「執著するな、こだわることなかれ」ということが教えられている。慈悲の教えは『スッタニパータ』の新層になつて現われる。仏典とジャイナ教聖典との所傳が一致するところから見ると、慈悲の徳を特に強調したのはサーリプッタであり、それ以後仏教が急激にひろまつたのだと考えられないだらうか。

『聖典のことば』にしろされているサーリプッタの實踐は『スッタニパータ』に述べられているものに大體對應する。

『スッタニパータ』にはいう、

『修行 *tapa* と清らかな行い *brahmacariya* と感官の制御 *saṇḍama* と自制 *dama* 』——これによつてバラモンとなる。これが最上のバラモンである。』

『眞實もてみずから制し *danta*（諸々の感官を）制し、ヴェーダの奥義に達し、清らかな行ない *brahmacariya* を修した人、——かれに時々供物をささげよ。』

ここでは佛典でありながら、「佛となる道」を教えないで、「（眞の）バラモンとなる道」を説いているのである。つまりバラモン教的なことばを用いていた初期の佛教なのである。ここに擧げられている修行と清らかな行いと自制とはウパニシャッドのうちに述べられ、また感官の制御は敘事詩に説かれている。ところで『聖仙のことば』のうちサーリプッタのことばのうちにも、右に對應することが説かれている。

修行 (*tava*, v. 12) 清らかな行ないをする人 (*bhacarin*, v. 22)

感官を制御した人 (*dantiṇḍiya*, v. 13) 自制した人 (*danta*, v. 14)

ただし『スッタニパータ』の右の詩句のあたりには出ていないが、サーリプッタのことばではここでも「あわれみ」(*daṇḍa*, v. 12) を説いているから、慈悲の徳はサーリプッタの強調していたところであることが、ここでも確かめられる。

なおジャイナ教のほうでも、似た教えを述べている。

『自己にうち克ち danta 瘠せて、血肉を減らし、よく
誓戒をまもり (suvaya || suvata)、ニルヴァーナに達
した苦行者 tavassi——かれをわれらはバラモンと呼
ぶ。』

しかしジャイナ教が「瘠せて、血肉を減らす」苦行をめざ
していたのに、サーリプッタはそれとは異つて、苦行に重き
を置かなかつた。かれは「快適な食物や坐臥所」でも、「不
快適な食物や坐臥所」でも、みな受けてこたわらなかつた。
また當時の仏教修行者のうちには敘事詩の仙人のように森に
住んだり道場 assama と稱する庵に住む人々が多かつたが、
サーリプッタは必ずしもこのようなところに住む必要はな
いと主張した。そのような主張にもとづいて、のちにピクた
ちが村里に住み、ついには僧院(精舎)に住むようになった
のであらう。

なお修行者の心がまえに關して、「自己を偉く見せてはい
けない。實際に修したとおりに他人に見せるべきである。」
とサーリプッタが語つたと『聖仙のことば』(第二五頌)には
説いているが、これはまた仏典の最初期の詩句のうちに説か
れていることである。

『質問されないのに、他人に向つて自分の戒律と道徳を
言いふらす人、自分で自分のことを言いふらす人があれ
ば、

かれは聖なる眞理をたもつていない人である、と眞理に
達した人々は語る。

平安となり、心が安靜に歸した修行僧が、戒律に關して
「わたくしはこのようにしている」といつて誇ることな
く、世の中のどこにいても煩惱のもえ盛ることがないな
らば、かれは聖なる眞理をたもつている人である、と眞
理に達した人々は語る。』

自分を偉い者に見せかけて、他人を輕視してはならぬとい
うことは、繰返し教えられている。

結論

(1) このようにジャイナ教徒の伝えるサーリプッタの説と
原始仏教聖典のうちの最古層の説とがかなり一致し、あ
るいは符合するということは、兩者の所傳が相當の程度
に歴史的事實を傳えていることを證するものであらう。

(2) 最初期の仏教の若干の仲間、サーリプッタをその指
導者として仰いでいた。

1 *Isthasiyaivm. Ein Jaina-Text der Frühzeit.* Von Walter
Schubring. *Nachrichten von der Akademie der Wissen-
schaften in Göttingen. Philologisch-Historische Klasse.*
Jahrgang 1942. Nr. 6; 1952, Nr. 2. Vandenhoeck und Rup-
recht in Göttingen.

2 この書は最近本邦でも學者に注目され、研究されている。佐

サーリンッタに代表された初期の佛教（中 村）

10

伯眞光氏 'Isibhasīyāim に つ づ' (『印度學佛教學研究』第

六卷第一號、昭和三十三年一月、一七〇—一七三頁—)

Seiten Matsunami, 'Buddhistic Variants of Two Portions of the Isibhasīyāim' (『印度學佛教學研究』第九卷第二號、昭和三十六年三月、七四八—七四一頁—)

3 「……とサーチヤンッタが語つた」云々の様な文章を、一連の詩句のあとになく形式は、『スッタニパータ』の云々のパレーヤナ篇の場合と同じである。

4 eyam buddhāna sāsanam. これは佛典の中に出づ来る定型句である。

5 etam buddhāna sāsanam. (*Dhammapada*, 183; *Milindapañha*, p. 394.)

6 tucche jānammi samvego, nirvedo uttame jame じふと 舞うにんたにんた samvego *narakatī-gatī-avalokanāt sambhūti*, nirvedo *viśāyeṣv anabhisāṅga iti Siddhasambhūti*, nirvedo *viśāyeṣv anabhisāṅga iti Siddhasambhūti* tucche *nīlāste* jame samvega *iti*, uttame *tu* nirveda *iti* と註する。佛典の用例から見ると「恐れず厭ふ離れぬ」といふのである。(Sn. 935-936.)

7 vesō liṅgalakṣitaṃ munivraṃ. (Schubring.)

8 Cf. pāṇe dayā, (Sn. 117.)

9 ārambhanam nirodhena n'atthi dukkhassa saṃphavo. (Sn. 744.)

10 dukkham *arambhapaccaya*. (Sn. 745.)

11 sabbarāmbham paṇissesja *anārambhe-vimuttino* (Sn.

745.)

6 munayo *pariggaham hitva* acariṃsu. (Sn. 809.)

pariggahā yassa na santi keci. (Sn. 470.)

na hi santi niccā *pariggahā*. (Sn. 805.)

pariggahā vā pi kuto pahūtā. (Sn. 871.)

icchānidānāni pariggahāni. (Sn. 872.)

pariggahesu muni *noḥalito*. (Sn. 779.)

na heso labbhā *sapariggahena*. (Sn. 393.)

10 sattuva = sadbhāva. (Schubring.) じふはゆるすしもサーン

キヤ哲學じふはゆる sattuva を意味じふはゆるじふはなくじふ、それ以前の段階の觀念を示じふはゆるである。すなわち身心の清淨 (sattvaśuddhi, *Chand. Up.* VII, 26, 2. sattasa suddhatā, Sn. 435.) じふはゆるすじふはゆるじふはゆるである。Cf. jñāna-prasādena vīśuddhasattvas. *Manḍ. Up.* III, 2, 8. じふはゆる *Isibhasīyāim* 11, v. 4 じふはゆるにんたにんた (ニコーサーラ) の説を述べる場合、sattuva じふはゆる語が同様の意味で用じられる。

11 原文には dayam (acc.) とある、ニチトリンタは dānam と解じふはゆるが、何も所有しない無一物の修行者が施與を行じふはゆる困難じふはゆる、これは dayam と解すべきではないからである。

12 sallaviddho va ruppati. (Sn. 767.)

13 āturāṇam hi kā niddā sallavidhāna ruppatam. (Sn. 331.)

『わたづしはその (生けるもの) の心に、見がたき煩惱の矢が潜へづるのを見た。』(Sn. 938.)

- 14 *nirnidāno* 悉くニニムツリニ直ニ^ニ *nirnidāno* と
 なる^ニ *nidāna* と^ニ 語形は *Sn.* 773; 271; 728;
 270; 865; 870; 273; 874 に^ニ 出^ニ づ^ニ ぬ^ニ。
 15 次の句に^ニ かなり^ニ 相^ニ 應^ニ ず^ニ。
tapena brahmacariyena saṃyamena damena ca—
etena brāhmaṇo hoti, etam brāhmaṇaṃ utamaṇ.
 (Sn. 655.)
 16 「努力」の原語は *jogo = yogo* である。ヨーガと^ニ 語を^ニ
 う^ニ ら^ニ う意味に^ニ 用^ニ いる^ニ こと^ニ は^ニ フシ^ニ ヨーカ王の碑文にも^ニ 見^ニ ら^ニ れ^ニ る^ニ。
 17 嫌惡 *arati*. *Sn.* 270; 271; 436; 642; 835; 938; 969 (なお
 拙譯『ハタのうゑ』六四二頌註記参照。)
 18 *bambhacāri = brahmacārin*.
 19 *jāti = yati* この語は『スッタニパータ』では使われてい^ニ ない^ニ
 し、佛教一般にも使^ニ わ^ニ ない^ニ が、ジャイナ教およびヒンズー教で
 はしばしば用^ニ いら^ニ れ^ニ づ^ニ いて^ニ いる^ニ。
 20 *Sunandā* はどう^ニ ら^ニ う婦人であるかよく解^ニ ち^ニ ら^ニ ない^ニ。赤沼「印
 度佛教固有名詞辭典」(六六一ページ)によると *Dharmadassi*
 佛の母 (*J.* I, p. 39; *Buddhav.* p. 45) 燃燈佛の二上足尼の
 一人 (*J.* I, p. 29, v. 218; *Buddhav.* p. 18) である^ニ は^ニ 佛
 の前生 *Candakumāra* の父^ニ である^ニ ハナ^ニ スの *Ekarāja* 王の
 妃^ニ である^ニ し、王は諸妃諸王子諸王女等を供養^ニ した^ニ こと^ニ は
J. VI, p. 136) に出^ニ づ^ニ ぬ^ニ。
 ジャイナ教のほかに *Sunandā* は (1) *Nāgakumārendra*
Bhūtānanda の *Lokapāla Kālavāla* の最初の正妃 (*Thāna*
 サリーフッタに代表された最初期の佛教 (中 村)

- 4, 1) (2) 第三の轉輪王の正妃^ニ、婦女たる寶 (*strīratna*)
 (*Samavaya-parijīka*, 234) に^ニ 傳^ニ へ^ニ ら^ニ れ^ニ づ^ニ ぬ^ニ。(An *Illus-*
trated Ardha-Magadhi Dictionary by Ratnachandraji
 Aimer 1923, p. 788.) *Vedic Index* には不明。けい^ニ ち^ニ ち^ニ へ^ニ
 ンの古く典籍の中の物語に^ニ 結^ニ び^ニ つ^ニ くの^ニ こと^ニ を^ニ 解^ニ ち^ニ ら^ニ ぬ^ニ。
 21 *davve khette ya kale ya savva-bhāve ya savvadhā.*
 じ^ニ れ^ニ に^ニ 似^ニ た表現^ニ と^ニ じ^ニ ず^ニ、
dukkhaṃ parināya sahetta-vatthum. (Sn. 473.)
 こ^ニ じ^ニ 煙お^ニ よ^ニ 地所^ニ と^ニ じ^ニ う^ニ の^ニ 苦^ニ し^ニ の^ニ 起^ニ る^ニ 因縁^ニ ず
 な^ニ わ^ニ ち^ニ 業^ニ と^ニ 煩悩^ニ とを^ニ ち^ニ づ^ニ ぬ^ニ。(sahetavattum ti sahe-
tuppaccayam, saddhim kammakilesaṃ ti vuttam hoti, Pi.)
 22 *tāi* シヤンリ^ニ ン^ニ タ^ニ が *trāyī* と^ニ 解^ニ 釋^ニ する^ニ の^ニ は、ジャイナ教お
 よび佛教の傳統的解釋に^ニ 従^ニ つ^ニ いて^ニ いる^ニ の^ニ である^ニ が、原義は^ニ そ^ニ う^ニ で
 は^ニ な^ニ か^ニ つ^ニ たら^ニ しい^ニ。(拙著『ヴェーダーンタ哲學の發展』五〇
 〇—五〇一ページ。)
 23 例^ニ えば、解^ニ り^ニ 易^ニ い^ニ 實例^ニ を^ニ 舉^ニ げ^ニ る^ニ と^ニ イ^ニ ン^ニ ド^ニ 婦人^ニ の^ニ ま^ニ じ^ニ う^ニ サ^ニ リ^ニ
 ーは^ニ ヒ^ニ ン^ニ デ^ニ ー^ニ 語^ニ では *sāgī* である^ニ が、これを^ニ イ^ニ ン^ニ ド^ニ 人^ニ も^ニ イ^ニ ギ^ニ リ^ニ
 ス^ニ 人^ニ も *sari* と^ニ 音^ニ 寫^ニ し^ニ づ^ニ ぬ^ニ。また *Dramīda* なる *Tamil* と
 いう^ニ 名^ニ 稱^ニ が^ニ つ^ニ くら^ニ れ^ニ た^ニ。イ^ニ ン^ニ タ^ニ 古^ニ 代^ニ の^ニ 諸^ニ 言^ニ 語^ニ に^ニ お^ニ づ^ニ づ^ニ ぬ^ニ け^ニ る^ニ
 または^ニ 1) に^ニ 轉^ニ 化^ニ する^ニ こと^ニ を^ニ じ^ニ づ^ニ ぬ^ニ。Cf. F. Edgerton: *Bud-*
dhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary, vol. I: *Gram-*
mar, p. 18. (2. 46; 2. 47.)
 24 *Vinaya* I, pp. 39-44.
 25 松澤氏前掲論文参照。

- 26 *Sn.* 556-557.
 27 *Sn.* 622.
 28 *Sn.* 642.
 29 *Sn.* 646.
 30 *Sn.* 957.
 31 *Sn.* 386.
 32 *Sn.* 454; 545; 571.
 33 *Sn.* 517.
 34 *buddho. Sn.* 157; 161; 191; 408; 454; 486; 513; 545=571; 558; 696; 993; 999; 1005; 1127; 1133. *buddham, Sn.* 83; 134; 167; 377; 517; 622; 643; 646; 957; 1126.
buddhena, Sn. 276; 401; 1128; 1129.
buddhassa, Sn. 252; 377; 429; *buddhavacana, Sn.* 202.
buddhā. Sn. 81 (=480); 85; 86; 386; 523.
 36 *Sn.* 541; 555 と同じ來の場合がふつひな一般的である。(Cf. *sammāsambuddha*, 539) 々の他の場合 (*Sn.* 178; 180; 192; 446; 560; 597; 992; 994; 995; 998; 1003; 1016; 1031; 1145; 1147) はヒヤを特に尊崇するの傾向はあつて用ひられてゐる。複數に使はれてゐる場合 (*Sn.* 539) も同様である。
 37 *paṇḍita* (vv. 4; 5); *paṇṇa* (=prāṇa vv. 4; 6); *buddhimāṃ.* (vv. 5; 21); *dhīra* (v. 20) であるやうな語彙は
 38 v. 6.

- | | |
|----|---|
| 39 | <i>Vinaya</i> I, pp. 40; 41. |
| 40 | <i>Milindapañhā</i> , p. 394. |
| 41 | <i>Sn.</i> 655. |
| 42 | <i>Sn.</i> 463. |
| 43 | <i>Uttarajñhāna</i> , XXV, 22. |
| 44 | <i>Sn.</i> 782-783. 『義足經』上(大正藏、四卷一七七ページ下) |
| 45 | <i>Sn.</i> 453; <i>Dhp.</i> 223; 224. |

新刊紹介(一)

足利惇氏 校訂

「大無量壽經梵本」(Sukhāvativyūha)

B5判 本文六七頁

法藏館刊 定價 一、八〇〇圓